

## スリランカの紅茶

須賀 努

インドの南に位置するスリランカ。二〇〇九年の内戦終結まで、何となく近づき難い国との印象があったが、最近では政府が積極的に外国人観光客を誘致し、欧米人やインド人を中心に多くの観光客が訪れている。スリランカと言えば何と言っても紅茶の国、いよいよ本丸に切り込んでみた。

## セイロンティの歴史

スリランカの紅茶はセイロンティと称される。それはスリランカが英国の植民地となった時代に始まることを意味する。実はスリランカには元々茶樹はなく、茶は英国人によって政策的に持ち込まれ、プランテーションとして発展した。中国から茶葉を大量に輸入していた英国は、自国の植民地であるインドでの生産を目論み、中国茶樹がアヘン戦争前後に中国からインドのカルカタッタへ運ばれ、ダーズリンなどで植えられた。その頃、スリランカに茶樹を持ち込んだ者もいたというが、成功はしていない。

当初スリランカの主要な茶産地を回り、その歴史を聞いてみたが、どこでも「スリランカの紅茶はジェームズ・テラーが中から直接運び、植えた」との説明を受け、実際に茶畑の茶葉は中国産小葉種に見えた。だが念のため、キャンディにある茶葉博物館に足を運ぶと、事情は違っていた。マネージャーによれば、「ジェームズ・テラーが何処から何を持ち込んだかは実ははっきりしていないが、彼が直接中国に行ったとの記録はない」とのこと。恐らくはカルカタタの植物園から茶樹または茶の種を持ち込み、商業的に植えたと推測されている。

ジェームズ・テラーはスコットランド出身、十七歳でスリランカに渡り、茶の栽培を開始した。当時スリランカではコーヒー栽培が始まっていたが、疫病により大きな被害が出たこと、また英国で紅茶需要が高まったことを背景に、一八六七年に茶の商

業生産を開始し、一八七二年に初めての輸出を行ったという。テラーは実は相当のオタクではなかったのかと筆者は推測しており、ある新聞記事にも「テラーは紅茶と結婚した」と書かれ、生涯独身だった。今回の旅で驚いたことは、英国人は本当に開拓精神があり、相当奥深い場所にも早くから茶畑が開かれ、鉄道を通して茶葉をコロンボに運んでいた。当時の鉄道の終着駅、バドゥウラへ行くと、百年以上変わっていないような雰囲気駅の川が川のすぐ横に建っており、往時を偲ばせる。

## 茶園労働者はタミル人

スリランカの内戦は一九八三年から二〇〇九年の二十六年に渡り展開されたスリランカ政府とタミル・イーラム解放のトラ(LTTE)による戦いである。どうしてもタミル人というと、マジョリティーであるシンハラ人の敵、というイメージが付きまとう。



ヌワラエリアの茶畑 茶摘み風景 (2012年11月 筆者撮影)

ところがスリランカの主要な茶産地であるヌワラエリア、キャンディ、ウバを訪ねると、茶業労働者の殆どは何とタミル人であった。実は英国植民地下で発展した茶業ではあるが、地元のシンハラ人は英国人の下で労働することに抵抗したため、英国はインド南部のタミル人を労働者として大量に導入、約百五十年の茶業の歴史はタミル人労働者抜きには語れない。

ただ関係者はこう強調する。「茶畑のタミル人は北の方のLTTTEとは全く違う人々。誤解しないでほしい」。茶畑付近に点在する労働者集落を訪ねると、ヒンズー寺院を中心に、決して豊かとはいえない家々が連

なる。タミル人労働者は百年以上に渡って、黙々と茶葉栽培、茶摘み、製茶の過酷な作業に耐えてきた人々とその子孫、スリランカの茶業を支えてきた人であった。このような現実も茶畑に行ってみて初めて分かる大切な歴史である。

#### スリランカ茶の現状

今回はスリランカ各地の茶工場見学が中心だった。現在最大の産地となっているヌワラエリア、世界三大紅茶の一つに数えられるウバ、そして仏教の聖地、古都キャンディ。いずれも工場を訪問すると、案内人が英語で工場見学、お茶に関する説明をしてくれ、外国人が多く訪れていた。外国人



ヌワラエリアの茶工場 案内人について見学 (2012年11月 筆者撮影)

観光客誘致の政策の一環かと思われるが、お茶好きには紅茶の試飲などもあり、またお土産として直接購入することも可能で、嬉しい。

ここで飲んだ紅茶の中には品質も良く、美味しいと感じられる物がいくつかあったが、工場ごとにブランド化して輸出するという業務は殆ど行われていないようだった。製茶された茶葉の多くは、コロomboにあるティーオークションに送られ、ヨーロッパの有名ブランドなどに競り落とされて、ブレンドされていると聞く。セイロンティの名は有名であるが、各地の特色が中国茶などと異なり、あまり浸透していない。これは勿体ない現象だと思う。

一方、街のティーショップに入ってみると、売られている紅茶は殆どが安いダストが中心であり、庶民はこれを煮出して、ミルクと砂糖を混ぜるチャイを飲んでいる。スリランカで「ティ」と注文すれば、出てくるのはチャイであり、ストレートのティが飲みたければ「プレーンティ」と言わなければ出て来ない。

二十六年の内戦終結から三年、スリランカは国を開き、新たな道を歩んでいくのだろう。現在はまだ国内需要も弱く、従来型の輸出中心の茶業もどこかで変わっていくのではないか。世界のお茶愛飲家もそれを望んでいるような気がしている。

(コラムニスト)